

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 141: 70-87
Issue date	1911-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6239
Right	

雜報

端艇部報

あると言ふ四月九日、繪津の湖上は雨に煙つて暮れた、あるとは勿論春のレースがあると言ふのの意味する。其の次ぎの朝はやはり濁つた雨風が頬を氣味わるく渡つて行つたが、それでも開催の廣告がしであるので金入は砂取りの濱屋から龍南會の小舟に掉して水郷の朝を靜に下繪津に流れた、敘述の筆は舟を中心として動く。

舳に立つて下手な竹生島を唸つてゐる中早や舟は湖畔に着き候程に急ぎ自分のもの丈は忘れずに取つて審判船に上つた。花火がをくればせにボン／＼と馬鹿の様に空に裂けた。樂隊は目を忘れたのか來んので淋しい事つたらない、それでも朴訥に育はれた龍南の健兒はメタルを唯一の希望の光とあがめて三隻しかない小さなボートに全身の努力を注いで漕いだ

但しプログラムに載つてゐる競技者の名前と實際とは九で違つてゐる上にボートの色まで無茶苦茶で記録するには餘りにワヤだ。そこで、つまらん死んだレコードは云々しまいと考へて記者は一渡りコースの鹽梅を瞰た、コースもあんまり完全ではないらしい第三コースに當つたボートは最初の程は常に敗北を食つて、どう／＼それが最後の命運まで知らして呉れる前兆となつた。

何度かボートが行つたり戻つたりして居る中に樂隊がヤンヤとはやして來たので多少色氣もつき、活氣も出て來た、已に之までに記者も二度漕いで不自然な筋肉の運動からもてん程弱つてた、ビクツ／＼と肉の底の旁を血鳴が響いて居た。但しメタルにもなんにもならん、くたびれもをけの骨折り損だ。其の中晝飯時になつた。

午後になつてからは大分見客もやつて來て、勢がよくなつた、但しくだ／＼しい事は止めにして日輪を夕方の方の空まで引つ張つて行く。其の間に於て、大事件があつたと言ふのは審判船の中に一人の馬の糞がころげ込んで居た事だ。記者は怒號一番退去を命じ

る。自首をひくひらして出て行つた。横道な女も居たものだ。それと由比教授の筈のはち加減のうまい事だ。さすが學界を遊泳してゐる人だけに操縦が確だ。妙な處に力腦を入れて拜見仕まつた。第二撰手のリリスが來た。緑と白と赤旗が見客の船に翻る。自船一番目を刺戟する緑が一番馳目だ。あたりの新緑と水色と暮彩に溶け入つて、てんで存在も認められん位だ。リリスの結論は緑が半艇身弱の差で白に後れ赤がどろ尻となつて威風凛々根據地に曳き上げた。芳名は下の如し。

第二單元

青

五

赤

舵手 薄田 良二 進 來 要 岩 永 仁 雄
整調 八幡屋春太郎 佐伯 敬雄 村田鷹二郎
三番 井上 庫定 富田 榮一 佐藤桂二郎
二番 三村 正堯 川内義太郎 横山 鐵夫
一番 太田 鎮雄 大岩復一郎 原田 永之助
大分暗くなった頃一選手は大きな腕に暮色を浴びて
スタートに並んだ。忽ちにして鈍聲が鳴つた、水を裂
く艫聲、旗の閃、怒號についで眼の前に歸つて來た

のは白だ。彼はなれど言ふ落ちついた勝ち方をしたのだ。彼は立派に勝つた次ぎに來た赤をぬぐ艇身強の差で又優勝旗を握つてしまつた。それるさうだ。それですんでしまつた。實は手帖の中には撰者の個々の批評や、戦況を、いわしく書いたのだったが、氣がふさふさしてゐるからの、又來年ともくわへて書こう、と芳名は次ぎの如し

第一選手

普

白

赤

舵手 平澤 幹山 本徳雄 橋本 深一
整調 石川 豊記 小野 純太 佐藤 清熊
三番 内田 又雄 岡崎 泰助 安岡 惠經
二番 村上 義臣 里村 靜一 山田 敬三
一番 土居 正賢 田淵 壽郎 執行 作藏
記者は縁に期待して居た、さうして落膽した。然し
なんとなく擅の浦に没落した平家の運命を見る様な
氣がしてならなかつた。其處に詩があつたからだ。
かくて繪津は再び雨に暮れた。(平原子)

春季野球大會

七高軍去つて野球界又事なく長崎醫專の挑戦も一時の夢と消れて、跡なく、花は咲けども顧る人はなく、若草は緑なせども訪ふ者もなき武夫原頭の寂漠は深く吾人に訴ふるに似たり「武夫原頭に草萌へて」の聲は龍南八百の健兒を默せしめざるが如くその生氣満々たる縁を見ては吾人又立たざるを得ざるなり。於是例年各中學撰手を招いて行ひ來れる春季豫餞試合を廢し、對部有志の試合を行ひたり。幸に校友諸兄が熱誠なる應援の下に開催し得たるは感謝に堪へず。時間の都合上有志仕合は七回で終る事とした結果一プラス対九を以てり組の勝利に歸す續いて二部對三部試合を行ひたり。

金澤大高兩氏審判の下に九時四十分より開始せり二部先攻を第一回二回共に得る所がなかりき第三回中村三壘越で出でしも一壘に刺され渡邊セービッツに重田バンドに江口は四球を利し久保田ショートの大失に出で中島中山のヒットに生還佐藤四球に出しも佐々中村のヒットの爲中嶋中山刺殺されこゝに三部代

りせめしも得る所なかりき。第四回三部平凡宇都宮安全打して出で、橋本死球共に二三壘に據る強打手三振したれども佐藤の犠牲球に宇都宮生還、横山セコンドにゴロを送りて止む第五回相方共に振はず橋本安全打して三壘に據りしも入壘の機なかつた第六回三部無爲の後を受けて橋本一壘の失ひ出た原ショートを突きしも佐々これを捕へて二壘に送り爲めに橋本アウトとなる原巧の盜壘と佐藤の犠牲球に生還横山ピッチにフライを與へて終る四對二となり應援やゝ色めいて來た第七回久保田ショートの大失に一舉三壘に以て三壘を奪ふた中嶋四球に出でしも中山の三壘にフライを呈したるによりダブルプレーとなる佐々ショート三壘間を抜て出で久保田生還中村ショートにフライを得られてサイドアウトとなり佐藤ショウ下の失に出で敵のエラーに入壘次後奪はず只篠原の二壘に出でし位なり第八回渡邊ツーベースヒットシテ出で重田の犠牲球に三壘に進み江口ショートの大失に出るや生還次で江口三壘を奪はんとして刺さる久保田中嶋共に敵の大失に中山三壘を突いて出でフルベイスとなり二部大に彌治りしも佐藤ゴロに死

し事なし第九回平凡六對三にて遂に二部の勝となり
一時三十八分終る。

此回三部原二部江口の活動は共に注目を引きたり三
部宇都宮の球奮はずSS篠原はエラー續出しために此
敗を招きしやの感ありき。

一		二		三	
部	成	部	成	部	成
安全打	10	安全打	10	安全打	10
打數	55	打數	55	打數	55
得点	11	得点	11	得点	11
盗壘	0	盗壘	0	盗壘	0
犠牲打	1	犠牲打	1	犠牲打	1
失策	1	失策	1	失策	1
位置	2	位置	2	位置	2
域	重江久中佐佐中渡	域	田口田島山藤々村邊	域	宇都宮原佐橋佐橋篠原
壘	3	壘	3	壘	3
死	4	死	4	死	4
三振	3	三振	3	三振	3
球	10	球	10	球	10

二壘打 渡邊 (宇都宮)
三 振 10
四 死 4 (江口)

位置 1 7 2 4 3 3 5 6 9

(以上七日)

二部對一部優勝仕合

第二回二部先攻森SS3B間を突き平瀬2Bオバーに出で瀬
川RFの方に安全打し森生還平瀬又一壘の失に入る瀬
川敵のエラーに還る山本2Bフライに死し阿部敵の失
に出で巧に2B3Bを奪ひCの失に本壘に入る以後振は
ず一塁四点重田Pゴロに死し中村LFヒットに出で三
壘を盗み中島のゴロをSSのCに悪球を投じたるによ
り生還中島二壘に進む久保田Pゴロに死し中嶋を三
壘に送る江口の三振をCの失したるにより中嶋生還
す中山三振 四對二。

第二回一アウトの後森三壘のエラーに次で2Bを取り
Pの失に三壘に進み次で本壘に入る以後平凡佐藤ピ
ゴロに死し佐々SSオバーに出で巧に三壘に入り渡邊
の犠牲球に入壘重田三振す 五對三。

第三回山本四球を利用して3Bに據り阿部の犠牲に生還
丸野又四球に出でしも2B3B間に刺殺され湯本RFに安
全打して出でしも後續振はず二部代り攻むるも久保
田の三壘に出でしのみ 六對三。

中員舊選手大村學士來校滯熊一週間の短時日ならにも係らず特に我部の爲め熱心モチチされた。茲に記して感謝の意を表す

十二日太村君觀迎マツチを大高審判の下に行ふ。

A										B									
失策	盜壘	犠牲打	安全打	打數	得点	成城	位置	成城	打數	得点	成城	位置	成城	打數	得点	成城	位置	成城	打數
1	2	1	0	0	0	1	江大	阿部	0	1	0	1	阿部	4	4	0	1	阿部	4
2	1	0	1	0	0	2	大瀬	金子	1	0	0	1	金子	4	4	0	1	金子	4
3	4	0	1	0	0	3	湯佐	森	4	4	0	1	森	4	4	0	1	森	4
4	4	0	4	0	0	4	山長	木野	0	1	0	0	木野	0	1	0	0	木野	0
5	0	0	4	4	0	5	佐藤	平中	0	0	1	0	平中	0	0	1	0	平中	0
6	0	0	1	1	0	6			0	0	1	0		0	0	1	0		0
7	0	0	0	0	0	7			0	0	0	0		0	0	0	0		0
8	0	0	0	0	0	8			0	0	0	0		0	0	0	0		0
9	0	0	0	0	0	9			0	0	0	0		0	0	0	0		0

5 35.4 2 2 7
2B ヒット 原
(江口)
(部阿)

柔道部報

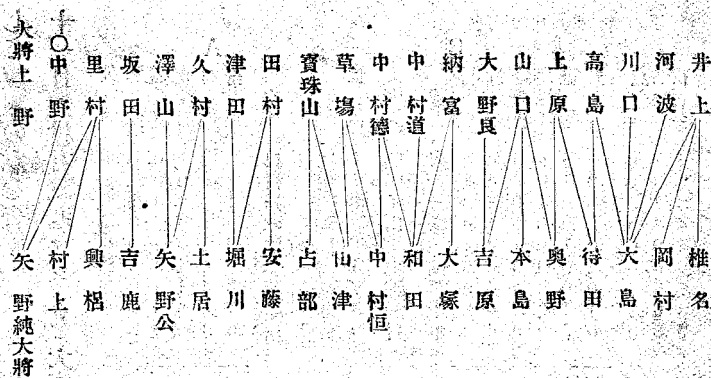
柔道豫餞試合

維時明治四十四年五月四日、青葉の影に若き夏の氣動乱して壯士徒らに脾肉の肥大せるを啣ち、鉄腕の熱血高鳴りして流るゝを覺ゆるや切なり、午後三時の號鐘と共にいでや敵の首級を擧げて功名手柄の歴史を作らんと馳せ集る若殿原、龍南三年の思出一と汗流して最後の花を武夫原に美しく咲かせばやどてかけ來る三年生の鬚武者、そが龍鬚のさま。さらば禿筆を走らせて。

田村一安藤、共に新手の顔ふれ初め田村業ありをどりしが安藤色をなして奮然とし立ち、かけし脊負を甘く利用せし田村返しにて見事勝つ。

田村一堀川、勝ち誇りたるしれ者よく聞けよわれこそ福岡の産骨て斯道に志を有せし者龍南に來りて脚氣の氣味にて茲に其枝を振ふの期無き徒に歳ならんとす今や此日ありと大く短き體を軽く動かし初め業ありをどり遂に思切つてかけし大外落立派にきまりて堀川の勝。

紅 白



ではと思はしめしが土居があせりたけりて深身の方を漲らせて攻め寄するを久村輕く受けながして時機

津田―堀川、津田は五尺八寸に近き長い男、長いと短いの立合ひ、其体格より各々自分に有利の業を出してかけり闘ふ津田の長い方や利ありけむ業ありをこつて猶ほつとめしも遂に勝敗決せず駒を返へして東西に分れ行く。

久村―土居 久村斯道にかけてはメツキリ近頃の上達然し一部の短艇撰手に其人ありと知られたる土居の体略を以てし

の到来を俟つ、土居益々心をこがしエエとかけたる大外刈に久村無慘に落命と見ゆしが業有りにて危急を免れし久村時ありてか上四方に大兵士居を組織伏せしには土居あがけども能はず遂に首級は久村によりて擧げられつ。

久村―矢野公、矢野元來柔道本場の福岡産なれど福岡時代には絶て雑巾を着たるを見ず武道盛なる熊本に來りてより本職のラケットを棄てて以來驚く計りの御上達、其堅固な安全な取り口批評の限りに非ず、加ふるに味方の土居努力効無かりしを見ては奮然たらざるを得ず、久村力めたりしも押込にて敗らる。

澤山―矢野、嘗て兩人は勝負を決せずして今日譲りしもの、今日こそは御身が技と吾輩が倆何れかに優劣を決せざる可らずと共に自重して闘ふ、矢野がかけし大外刈を返しにて業有りをとどし澤山秘術を盡せしも甲斐なく再び決戦を後日に殘して分れしこをくやしけれ。

坂田―吉鹿、自分の事を自分にて書くは何となく遠慮を要するがまた自分をこよなう賞めたき氣もす

それとも近頃ある部にて自盡自賛の流行る龍南なれば
にや、昔は俺が坂田に勝つた事ありとは今度の勝負
に何等の關係もなきようなれど、實は此機を以て坂
田が密に復讐の大野心はあらざるかとは俺が邪推の
みにもあるまじ、實は二人とも一年餘り此難巾躍り
に椽を斷ちしものから呼吸が次第に太くなる戰慄な
る二人には、明に其鳴のように胸に響く、我輩三四
度巴を試みしが効なし、坂田が俺を袈裟に圍撃んと
する、俺が組は御免と立つて一奮發し卷込跳腰を試
みしも駄目、卒業する坂田に敗を取らすもよからず、
俺が今度復讐さるゝのも殘念とは得手勝手手の自己辨
解、實をいへば昨日が勝負日と間違へて鶏卵二つす
ゝりしか今日は何のききめもなかりし事を白狀して
引分けとすべし。

里村「興梠、里村例の長い足を以て引つかけんと
す、興梠のために業ありまで取られ色をなして闘ふ、
忽ちにして電光の如くかけし跳腰見事にきまりて、
興梠技を出すの暇無きに敗れたりしは味方のため返
すゝも惜しき限りなり。

里村「村上、龍南唯一の好取組を以て目する觀衆は

待つて居ましたといはぬ計りに拍手する響暫くはな
りもやまず、次で水を打ちし如き靜にかへり、里村
初めのうちは業を出さず、村上があせり焦れてつめ
寄り攻め寄するをいと冷然と構へ逃れ、つて時機を
俟つものゝ如し、村上かくと知るや知らずやヤツと
かけし内股見事にと思ひしが觀衆の中に轉げて業有
りとなりしは殘念、高く一聲里村の内股きまりで村
上無念の最後。

里村「矢野純、白軍は遂に大將矢野駒を速めて立
ち向ふ、共に輕々に追らず一步は一呼に應じ、一動
は一吸に叶ふ時ありてか矢野がかけし跳腰鮮かにし
て里村が体高く中空に圓を描いて輕き地に落つ、敵
も味方も膝を打ちて嘆賞のごよめきなりも止まず。
中野「矢野、共に吾か部の重鎮、便々たる中野の
腹、稜々たる矢野の鐵腕、多く見る可らざるの特徴
也、中野巴を試みて成らずさかさず組みに行かんと
せしを矢野さはさせじと固く持して動かざれば中野
術をかへて後締めに成功し紅軍は大將上野を残して
紅の旗高く西陣に翻る。

賞品は白壁部長により渡され茶菓に會談して征衣を

收めて散會せしは午後五時半。

水泳部々報

明治三十八年霸氣滿々たる我校の有志風光明媚なる唐津を撰んで水泳會を設置してより後四年遂に獨立して龍南會の一部となるに至り水泳部と稱す。爾來年を閲する事僅かに二年なりと雖も部員の熱心と全地方有力者の盡力とにより我部をして可驚盛盡の境に進ましめ己に昨年は十哩遠泳成功者十六名を出し且つ同地小學校の教鞭をさねるに至れり。

今や春已に逝きて流汗淋漓拭ふに遑なき三伏の夏日は來れり此時や是れ實に我水泳部獨特の時期にして各種の運動部皆門戸を鎖す時我部は龍南一の健兒を二手に吸収し、かの唐津灣頭白砂青松の間に一小自治團を開きて大々の活動を試みんとす。夫れ嶋國民たる吾人今更水泳道の要を説くは抑も愚の極なり。只吾人はこゝに我水泳部の如何に和氣靄々として其樂つきざるかを紹介して以て有志諸君の來會を切望する者なり。

唐津は佐賀縣西海岸の一都市にして松浦川の清流東

端を走り海に注ぐ所西の濱と稱し我が水泳場のある所なり。灣内の海水飽くまで清く水温又低からず海月の少きと潮流の具合のよろしきに至りては蓋し我國海水浴場の模範たり。晨に起きて曙光東山の上に紫雲を破り烟霧深く鎖す灣内の次第に曉色に移り行くを眺めよ。萬編の詩と雖はるかに及ばざる所なり朝食を喫して更に綠蔭清風の下に愛讀の書を繙き日高うして炎熱加はれば碧波の中に身を躍らして悠々鯨鯨の窟を探る若し夫れ沐浴し終りて晩涼を虹の松原に逐ひ夕陽西山の頂に懸響返照碧海に映じて金波碎くるの時或は明月の夜一葉の扁舟を灣頭に浮べて烟波香靄の中に船櫂を敲いて明月の詩を誦するに至りては蓋し清遊極つて盡くるを知らざるなり苟しくも浩然の氣を養はんとするものは一度我が部に來れよ這般の趣味は自ら來り味ふにあらずんば遂に生涯得る能はざるなり。

由來我が水泳部の特色は和氣靄然たるにあり友情の純美なるにあり。かの卑しむべき部的感情も黨派的猜疑も此所に來りては全く地を拂つて影をだに止めず況や席順の競争オヤ。考試終れる吾等何んぞ明日

の事を思ひ憂へんや。吾人の目的は斯道の奥義を極むると共に健全なる精神を養ひ少くとも來るべき一學年間の癡猛なる勉學に堪へ得べき身体を作るにあり。徒らに居して強毅朴訥を衒ふをやめよ。

一度我が部に来りて三句の「ッウホシ」に赤銅色の鐵腕鐵脚を鍛練せし者にあらざれば共に語るに足らざるなり。心中些の城府なき自炊團は是れ實に「スウイトホーム」なり極樂なり天國なり一度ここに相會すれば一見舊知の如く骨肉兄弟も及ばざるが如し。吾人はここに初めて友情の温きを切に感ずる者なり。終りに特筆大書すべきは部員技術の進歩なり余は泳ぐ能はずと云ひて我部に來らざるは抑至大の誤なり。已に經驗に兆するに初學者と雖三句の後には悠々十哩の海上を踏破して名譽の月桂冠を戴くもの少からず由來熊本は武士道の盛なるを以て天下に聞ゆ就中水泳道に至りては天下に冠たり小堀流はかの水府流と南北に相睥睨す我部は兩者の長所をとりて已に教目に示せるが如く諸氏の要求に對して充分の教授を致し殊に本年は飛臺船浮を造りて新に數種の跳入法を教授せんとす要するに身心を鍛練し友情を

厚ふし我校風を矯正する是れ我が水泳部の本領なり吾人は唐津灣頭三句の水泳部が確に龍南一千の健兒が元氣最良養成所たるを信するものなり天涯萬里の故郷に慈愛深き父母兄弟を訪はんとする友よ自雲を分け千山萬岳を踏破せんとする友よ又靜に讀書三昧に耽らんとする友よ願くば休暇の三句を裂きて風光明媚なる西の濱の靈地を訪はれよ自炊團の友情遠足會及習學寮數冊の書籍は或は諸君を満足せしむるに足らんか又陰鬱なる山間の温泉に身心を養はんと欲する者あらば此際速に志を翻し我が部に來れよ適度の練習は其効や温泉等と日をも同じくして語るべからず再び龍南一千の健兒に告ぐ願はくば我水泳部に來りて鐵身黑膚の健士となり益々龍南健兒の本領を發揮せられんことを。

附言

一、開會期間 自七月五日至八月十日
二、場所 肥前唐津町西之濱

三、合宿所唐津町西之濱松濱院内 (唐津驛ヨリ約十三分程)
一月三十錢内外。合宿所ニ宿泊セントスルモノハ必ズ毛布

又ハたんでん携帯ノリ

四、下車驛 唐津驛 (西唐津驛ニアラズ)
全町西之濱ニハ旅館及下宿屋澤山アリ

龍南會水泳部

綱 領

- 一、部員ハ凡テ風紀ヲ嚴肅ニ保ツベシ。
- 二、水泳道ヲ研ク事ヲ忘ルベカラズ。
- 三、本部ヲシテ秩序アラシメ凡テ一致共同ヲ旨トスベシ。

規 則

第一章 事務

- 一、龍南會水泳部將來ノ爲メ各自十分其責任ヲ重ンズベシ。
 - 二、本部ノ事務ハ水泳部長之ヲスベ水泳部委員其ノ命ヲ受ク之ヲ行フ。
 - 三、水泳師範ニ對シテハ盡ク其命ニ服從スベシ。
- ### 第二章 等級及進級
- 一、技ノ長短及勤怠ノ如何ニヨリ各等級ヲ定ム。
 - 二、等級ヲ左ノ六等ニ別チ教目ヲ列擧ス。
- 級外 蹴足、押手、平泳(兩輪伸)略体、
五級 一重伸略体、二重伸略体平泳(兩輪伸)正体、浮身、平跳、直跳、

四級 一重伸 二重伸 片拔手 一重伸 水府流大拔手略体 堀流早拔手 立体(小堀流踏水術) 水中平泳 順下 逆

下

三級 片拔手 二重伸 三段伸 諸手伸 水府流大拔手 神傳流 大拔手 小拔手略体 諸拔手 平体片拔手 觀海流蛙足

游 水底蹴伸 水中翼伸

二級 繼手伸 拔手伸 諸手拔平押 水拔手 立体(踏水術) 諸 應用 水中一重伸 水中平伸 逆下 式トビ

一級 片手拔 片拔手 救助法 波濤法 水泳術研究

三、進級 各級ノモノニシテ規定ノ教目ヲ修了シ左

記ノ距離ヲ游泳セシモノヲ進級セシム

級外 水ト三十間以上。水中一間以上

五級 水上三間以上。水中三間以上

四級 水上二間以上。水中六間以上

三級 水上三間以上。水中十間以上

二級 水上五間以上。水中十五間以上

四、名札ハ級ノ順序ニヨリ合宿所ニ掲グ。

第三章 游泳場規定

一、游泳場ニアリテハ必ず師範及助手ノ指揮ニ從フベシ。

二、成規ノ帽子及ビ水褌ヲ着用シテ練習スルモノトス。

三、游泳時間ヲ左ノ通り定ム

午前 自九時至十一時
午後 自二時至四時

四、游泳時間中ハ疾病其他不得止事故アル場合ノ外

皆出席シ無斷ニテ游泳場ヲ去ルベカラズ。

五、規定ノ時間以外ニハ猥リニ游泳スベカズ。

六、規定ノ游泳區域ヲ犯スベカラズ。

七、游泳時間ノ始メニハ脱衣場ニ集合スベシ。

八、出席簿ヲ作り勤怠ヲ調ブ。

第四章 和船使用法

一、和船使用時間ヲ左ノ通り定ム

自午前六時 自午前十一時 自午後四時
至全 九時 至午後二時 至午後六時

二、使用時間中ニ於テハ左ノ區域以外ニ漕出スルヲ

禁ズ

鳥島、金波樓、舞鶴城趾ヲ頂点トセル三角形

三、毎日最後ニ使用シタルモノハ脱衣場前ニ繫留シ
附屬品ハ一定ノ處ニ藏スベシ。

四、游泳時間中ハ一切和船ノ使用ヲ禁ズ。

第五章 雜則

一、水泳部ハ唐津ニ自炊制度ノ合宿所ヲ設ク。

二、毎週二回合宿所ニ全部員集合シテ茶話會ヲ開ク。

三、毎週游泳試驗並ニ遠泳ヲ行ヒ又臨時機ヲ定メテ
競泳ヲ行フ。

四、第一回遠泳一哩 第二回遠泳三哩 第三回遠泳

五哩 第四回遠泳八哩 第五回遠泳十哩

五、龍南會員以外ノ人ヲシテ合宿所ニ合宿セシメ又
ハ游泳場ニ入ラシメントスルトキハ必ズ委員ノ
認諾ヲ要ス。

(龍南會雜誌第百十三號所載水泳會規則參酌)

弓術部報

大砲小銃機關銃とだんぐ武器も發達する今日、
弓など昔の所謂飛道具なるものは頓と間に合はぬ、
が昔だらけの瓦のかげなきを嬉しがる人もある世の
中、兎角く浮き世は利害關係ばかりでもないかすまた
進歩開發向上發展の一天張りでもないかぬらしい。維
新以來廢れて居た擊劍柔道が頭を擡げ出すと弓術も
武道の仲間で御座ると近來漸く修業者が増加した。
そこでつんと現代に拗ねて昔の合戦の稽古(きこ)をや

つて見やうといふので遠的競射會なるもの思ひ立つた。

四月十五日青葉崩出づる武夫原に集り来る若武者の面々、鎮西八郎の再現は乃公で御座いと云はぬばかりの天狗鼻、射て見て鼻折つた人もあつたらしい、が全体に好成績二十本の中にて中り矢一等十八本五等十三本、之ならば龍南の健兒も祖先に對して面目ありと云ふものなり。

入賞者左の如し

- 一等 江副民也 二等 原口廣 三等 木下先生
四等 古川義之 五等 岡本糺

演說部報

青葉蔭清うして生氣天地に溢れて居る。玆に四月廿八日午后七時於端邦館例會が開かれた
三寸の舌頭説き去り演じ來つて抑揚波瀾激烈沈痛乍ちにして長江大河乍ちにして擊雷閃電實に盛會であつた

開會之辭 委員 樋口 芳包君
感化と向上 三、一 高木 四郎君

剌那の生活 一、二、乙 長船 美熊君
校風に就て 一、一、乙 中井 一夫君

活修養 一、二、甲 板垣 政治君

朝鮮統治論 一、一、乙 緒方 弘君

講評 宇佐美部長

終つて茶果を喫して散す時正に十一時辯士並に聽衆に對し深く感謝する次第である(芳記)

校風演說會

五月十九日(金曜)午後三時端邦館にて校風及び集會新規則につき臨時演說會を開く、會するもの館に充つ。

山村喜久茂君

先づ開會の理由を述べ次で集會規則果して効あるものか疑ひ、吾人はクラス會、縣人會等に於て其弊害を認めざるに此規則は此等弊害なき會合に束縛を與ふるものにして一人又は二三人にて私になす即ち陰に罪惡行れ安き會合には何等効無し、吾人は當局者が罪惡明々白々の者あらば相當の處分をなすべし、運動家の如きを亂視するをさらずと論じて降壇。

近藤駿介君

新規則に就てに非ず、もし聴者をして強いて其説意を解せしむれば目下の學生は目前の肉の爲に樂まんとする者多し、何ぞ彼等は靈的生活を解せざるさいふにありしが如し。本日の會の性質として餘りに餘遠き感ありき我輩の後方にて「校風の演説が妙な方向に這入つた恁麼事聞きに來たんではなかつた」と不平を言へるものありき。

執行作藏君

悲憤の色顔にあふれて、今や青年の意氣何處にある、龍山を師とし白水を友とせし二十年前の我輩學生義風何處に求めん、白霜雪の如きを踏みて君は前流をくめ吾は薪を拾はんと言ひし友情何處にか求めん、吾人今や自覺すべきの時ならずや卓を打つて降る。

小柳又一君

君の論は甚だ短刀直入なりき、換言すれば正直なる言ひ方なりき、君は入學以來吾校の會の多き事、會費の高き事等を告白せられたり、聴者として吾人大に同情する處あり、君よ茲に告白せられたる勇氣を以て用無きの會へは斷然行く事勿れ、今の世は酒々として一辯一筆のよく時流を左右すべきの時に非ず、黙して自個のみを完ふするに如く無し。

福田弦雄君

われかゝる壇上に立つ事二度、而かも二度とも校風を口にせざる可らざるは何故ぞや、さて酒々として現今青年の軟弱をこき「熱慮せよ而して斷行せよ」その君が持論を再び聞きぬ、蓋し吾人の解釋によれば熱慮は正邪の判別をなすを意味し斷行は大なる勇氣を意味するものゝ如し。宜い哉君が持論の此句や、君も願くば如何なる場合

にも此句を忘るゝ事勿れ、

合屋友五郎君

「現今の校風二十年前の校風と其優劣を認むるものに非ずと説き初めて」然れども現今の學生が元氣なきは事實也」と難じ「現今の教育者が現代の青年を捕ね、型にはめん」とするの故なるべし、現今の教育者は少し運動家にて肩を張りあるれば亂暴者となし或は無理に落第せしめて校より放逐し、入舎を拒絶する等の神經過敏なるある學校を聞きたり、校風の死したる故なきに非ず」とか何ぞか遠まわしに諷せしところ聴者果して如何にきくしか、ある學校とは果して何れの學校ぞや。

石田和吉君

君も亦合屋君の論の如く「ある高等學校に一友を有す其友語りて曰く吾校にては運動好きにして少し學問の方を下手にやる時は學校は厄介拔にして直に放校等の運に至らしめんさて巧に學科に欠点も與ゆさ、余は大に之を駁したる事あり云々」とある高等學校が我校に遠からん事を望むや切也、終りに「龍南八百の健兒が各部の撰手に同情して、校の元氣を發露せしむるはやがて我校風を振興するに大に力あらずや」と論じて降る。

國吉眞現君

飛入として眞先きに壇上に上り種々各方面に就て論じたる末痛快なるゼスチュアを弄し「此度の集會規則は罪惡を行ふ少數の者には効無くして吾々善良なる者を束縛せんとするものゝ如し當局者は願くば不良の者を束縛して吾人善良の者を束縛する事勿れ」と卓を揺つ

て降壇。

横手貞武君

冒頭に「吾は個人主義也」と書き、「彼の集會條例は自ら亡びんがために起りしもの也、吾人は吾人自個を省みて完全なるものとなさば、敢て校風を論じ木訥を叫ぶの要あらんや、彼の條例然る時に何等の權威なし、權威を認めざる時に彼の條例は亡びたる也」と聽者をして首肯せしむ。

藤山一雄君

模倣はそれ自身にあらずと叫び、今の高等學校滔々としてある高等學校の風に倣はんこと、例へば猿使ひの如し猿は猿使ひの風貌を望みて藝當をなせしが、諸君讀賣新聞の讀者は知れるならん今や此猿使ひは滅茶苦茶に破壊せられつゝあり、其親分猿使ひにして亡びなば其猿安んぞ藝當を演ぜんや此猿たりし地方の諸高等學校の校風自ら一應破壊せらる可きは理の當然也、とて深く吾れには吾れ自身の基礎を有せざる可らず、完全なる自個を有するに非ずんば何ぞ要を爲さんやとの深長なる辯を揮つて降壇。

大久保久平君

君は何はともあれ剛毅朴訥を崇拜すべしとの論の如かりき。中途に歸宅せし余は由比生徒監の説を聞かずして了を全するを得ざりしも要するに諸君の論は大同小異なりき(礎生)

卒業生豫餞演說會

五月廿日午後七時半より例年の如く縣會議事堂に於て卒業生豫餞演說會が開く。夕方より降り出でたる五月雨は夜に入りて益々甚しく、而も龍南獨特の演說を開かんとて、雨を冒して集る者堂に充つ、山村委員先づ開會の辭と豫餞の辭とを兼ねて輕快の辯を揮ふ。次で卒業せんとする諸士の演題に入る。

第一席

社會制度と國民道德 一、三、乙 土居 莞爾君
君壇上に立つや慎重迫らざるの口調を以て日本固有の家族制度より説き起して國民道德の美点を捉へて泰西文明の資なる個人主義が此等の美德と相容れざるを叫んで壇を下る。

○三十分間の辯其論據甚だ鞏固なりしも波瀾少くしてジエスチユアに不自然のところありまゝ操人形の手の如き動し方を見受けたる

第二席

時代思潮と我れ 三、三、一 宇都宮信夫君
十九世紀末に於ける歐洲思想界の有様より説き起

して我國現今の思想の混沌たる状態に轉じ、かゝる時代に生れたる吾人は徹の生れたる道學先生及び舊思想の自覺なき教に服する能はざるものなり、忠孝も自發、自覺したる時に其權威を認むるものにして、此渦卷く時代の思潮に圍繞せられたる吾々は靜に思ひ冷に考へて、眞の自個、眞の我れを作る事あるのみと論す。

○二十九分間の堂々たる演説眞に吾意を得たり、吾れ初めより此度の演説の題と人名との發表を見るや、先づ君と森谷君とに期待するもの多かりき。而して君や好題と豊富なる材料とを提げて前後只一回の龍南演壇に多く聞く可らざるの雄辯を揮ふ口調稍もすれば早きに失せんとせしも、内容の豊富と好題とは半夜第一の成功を爲したる所以なりと信ず。其現代自覺無き舊思想の人を罵倒するあたり、實に壯快を極む、好漢自愛せよ。

第三席

光化論

一、三、丙 森谷 定君

人各々特長あり短所あり、何人と雖長所あると同時に短所あるは之れ免る可らざるものなり、而して

此短所を補ひ匿すに長所といふ光を以てせざる可らずと簡單に論じ去る。

○十分間の短時間其論は簡にしてよく要を得たり吾人が前辯士と共に大に期待する處ありし程には其内容を見出す能はざりしも偉大なる君が體軀と滿堂の聴衆を壓する堂々たる男らしき音聲を吾人をして演壇に於ても此体此聲の最も必要なるを感ぜしめたり。

第四席

吾國の前途と地質學 二、三、乙、馬杉 暹君

地質學の必要よりとき起して之が各方面に重大なる關係あるを一々實例を引證して其論を確め、何人も之が智識の有利なるにもかゝらず之を無視するの吾國の前途に患ふ可きを論ず。

○三十四分間の滔々たる辯よく各方面に渡る該博なる智を吾人に興ふるや大なりき、もし其欠点を指摘せば語中往々明瞭を欠ぎ、了解に苦ましめしと、論と論とのつぎ目、木に竹をつぎたる感なきに非ず。之れ何も彼も強いて地質學にくつつけんと、力のたるによるならん。其邊今一といきの工

夫あらは前途多忙の辯士たるべし。とは某友の評。

第五 席

世界經濟政策と吾帝國 一、三、甲 山本俊麿君
先づ世界の大工業の大勢を論じて世界經濟の中心
点が吾が東洋に於ける清國にあるを論じ來り、此後
數年ならずして、パナマ運河の開通は著しく東洋經
濟界の變動を來す可く、東洋の責を負ふて立てる我
が帝國の地位や益々重大なりと論定す。

○三十二分間の演説、君としては短き方なり、問
題甚だ大なれどもよく吾人をして容易に首肯せし
めたり。其終りに至り次第に油の乗りたるどころ
實に君前後十度に餘る龍南の演壇上にて最後の花
を咲かしめしものといふ可し。君の演番となるや
場を去る者多かりき、彼等は此度も例の調査報告
的演説かと思ひて時間を惜みしものならん。君が
演説中絶えず野次る者を見たり、之が却て後半の
論を急調ならしめて、成功せし所以かも知れず。
要するに昨夜の君の論は頗る立派なものなりき。
もしそれ演説は論以外に、あるものが聴者に感應
を與ゆるものなりとせば、野次を多く出せし、全

く、此あるものを、欠けるには非ざるか、と君が
ために惜む。

第六 席

滾々の聲鞆鞆の響 一、三、甲 石田 和吉君
人生は恰も朝には深底千尋の谷間に滾々の聲をなし
、晝には洋々たる紺碧の淵となり、夕には岩に激し
て鞆鞆の響をなす彼の水に似たらすや。此變化多き
世に處して吾人は過去を思はず未來を夢想せず、只
々現在の自個を省みて現在吾人が最もベストと思ふ
處を孜孜斷行して行く事こそ最も堅實なる勤めなれ
と論す。

○廿九分間の莊重なる、老練なる、悠々たる演説、
よく聴者をしてしみく其を味はしむ。或人は本
夜の演説は二學期の競争演説よりも味ありしと評
せり。而し、君は元來慷慨演説に特長を有す、特
長は特長として失ふ可らず、吾が素木なる山出し
其まゝのかざりなき演説に於て、余は其特長を認
む、かゝる先入の感慨を以て聞きしにや、人生問
題は君に適せざるものゝ如く、處々煮に切らざる
語句ありしが如し。

◎以上は口の人に非ざる素人が耳に入りたるまゝの短評にして、其當を得ざるものあるや必せり、而かも吾人をして感激せしむるものは美麗なる文句にあらず、玲瓏玉を轉ずる如き音聲にあらずして、豊富なる内容と、更にあるものを要す、あるものは何ぞ、他なし、人格、之也。蓋し語句も音聲も演説の、ある一要素を占有するものならんも、吾人は更に演説を以て其人の人格に反映せしめて聞かんとするを以て前者は殆ど存在を認めざるもの也。何となれば人格なき人の好辭、好論、好態度は脂粉を施してしやべれる彼の舞臺上の俳優と何等の撰ぶ處なれば也。

樋口委員の閉會の辭にて堂を出でしは夜十時半、地を掘る雨を冒し袴をくぐり徒歩にて眞暗き路を立田山へと辿りぬ。

實は演説部委員の委任を受けて演説の内容を筆記すべき苦なりしも、記者席には燈火なくて筆記も儘ならず後に其草稿を集めんとせしも、本誌の印刷央は進みて遂に其時間なく、止むなく其大体を簡短に記す(礎)

庭球部々報

四月三十日九州帝國大學庭球大會參加選手及成績如左。

但一組勝負

大學		本校	
(松本)	浦間一	(三)	辻大場
(小早)	林一	(三)	安宮田川
(渡安)	邊井〇	(三)	川辛副木〇